

12

フランスのマンガ市場と腐女子

ジェシカ・バウエンス＝杉本

はじめに

2009年12月19日、京都精華大学国際マンガ研究センターによる、第1回国際学術会議「世界のコミックスとコミックスの世界」が京都国際マンガミュージアムにて開催された。その2日目には、「セッション1：少女マンガ、女性コミックス——ジェンダーとジャンルをめぐって」の講演者のひとりである溝口彰子が「ヤオイ」というジャンル¹についての発表を行ったが、このセッション後のディスカッションの際に、前日基調講演者として登壇し、コミックス研究の権威でもある、ティエリ・グルンステン（Thierry Groensteen）が、「フランス〔語圏〕にはそういうものがないから…」というコメントをした。このことに対し、その場にいた本章の筆者を含む、グルンステンと同じ文化領域出身の参加者数人が、彼の主張に異義を唱え、反論してみた。

しかし、当時としてもフランス語圏で「そういうもの」はすでに10年間以上の歴史を持っていたうえに、現在フランスにおいて、ヤオイというジャンルのマンガが翻訳版で流通し、そして現地に「腐女子」と自称するファンが大勢いる。

ヤオイ・マンガとして、フランス語圏で最初に正規翻訳版を迎えたのは、

1 主に女性作家が女性読者向けに描く男同士の性愛をテーマとする作品群を指す。249

トンカム²から1996年に刊行されたCLAMPの「東京バビロン」(原作は1990年から1993年まで連載)と、2000年には尾崎南の「絶愛1989」(原作は1989年から連載)である。以下で詳しく述べるが、フランス国内ではヤオイ同人誌も発行され、インターネット上にはヤオイ・ファンのコミュニティが複数存在する。1990年代から現在にいたるまで紙媒体やウェブ上で二次創作とオリジナルのヤオイ作品が続々と発表されてきているのである。

しかしながら、オーソドックスなコミックス研究の領域では、このジャンルは不可視的である。主な原因としては、フランスのコミックス界は男の世界であるという事実が挙げられる。例えば、グルンステン自身の『マンガのシステム』という学術書籍において言及される作品は全て古典的な、英語圏、もしくはフランス語圏の青年マンガである。グルンstenは日本マンガについての知識もあり、1991年にそれについての最も早い入門書を発表したことがあるが、少女マンガについてはあまり言及せず³、ヤオイやBLには一切触れていない。コミックス研究において、女性向けジャンルについての論考が少ないということはフランス語圏に限らない。しかし、日本語圏、英語圏のコミックス研究と比べてフランス語圏では少ないということが目立つ。

フランス語圏では、少女・女性向けのジャンルがBD⁴の創成期から存在しなかった訳ではない。猪俣(2010)が指摘するように、少女向け雑誌に掲載されていたBD作品は20世紀初期から1960年代の間人気を博していた。しかし、その後、日本マンガブームが到来する1990年代後半までは、少女・女性読者をターゲットとするBDジャンルはなかった。フラン

2 トンカム(éditions Tonkam)は1994年にフランスで設立され、主に日本のマンガ、そして1996年から韓国のマンガをフランス語圏で発行している。様々な経営困難を乗り越え、現在大手のアシェット(Hachette)がトンカムの出版物の流通を担当している(<http://www.tonkam.com/> 最終確認2014年2月24日)。

3 2009年末、日本のマンガ研究者との交流をも背景に、グルンstenは『マンガのシステム』の続編において少女マンガに少し言及するようになった(Groensteen 2013: 60, 65, 151)。

4 フランス・ベルギーあるいはフランス語圏のコミックスを指す bande dessinée (バンド・デシネー)の略語。

ス語圏に限らず、女性向けジャンルがあまり注目されてこなかったことは、1990年代以前、コミックス自体が本格的な「市民権」を得ていなく、コミックス研究という分野も成立していなかったためでもある。

1. フランスの社会背景とマンガ

現在の日本で見られる映画やテレビ番組は、英語圏、とりわけアメリカから輸入されるポップカルチャー系の作品が多い。これは義務教育の期間中に短くても3年間は英語を学ぶ機会があることも関連しているかもしれない。しかし、フランス語を勉強する人は比較的にな少なく、フランスのポップカルチャーが日本に入ってくる機会もそれほどない。従って、日本からみて、フランス文化はアメリカの文化より「遠く」感じられやすい。

日本における外国のマンガ作品では、「アメコミ」に基づく近年の実写版映画が示唆するように、「バットマン」や「スパイダーマン」などの典型的なスーパーヒーローものになじみがあり、その知名度も高い。フランスのBDのキャラクターも日本で知られているが、キャラクターグッズとして人気があり、文房具などを飾る⁵。「タンタン」と「スマーフ」という作品は近年ハリウッドでSFX版や実写版として改作されたことで、日本での認知度はアメリカ経由で高くなったともいえる。

BDの日本での認知度の低さに対して、フランスでは日本の作品は人気が高い。日本ではあまり知られていないが、日本マンガが海外で一番売れる国はここ10年間あまりはアメリカではなく、フランスである。1990年代からフランスで盛んに翻訳出版されてきた日本マンガは、今世紀に入ってから初めて本格的なブームを迎えるようになった。ペリテッリによると、2001年から2005年の間、フランスで流通した日本マンガは500%も増えた⁶。その一部は、フランスではヤオイ、日本ではBL（ボーイズラブ）と呼ばれるジャンルに当たる。

フランスでの日本マンガブームは現在も続いている。アメリカでは、

5 例えば、タンタン（ベルギーのエルジェ作）やスマーフ（同じくベルギーのペヨ作）等。

6 本論集第10章参照。

2005年以降、マンガブームが終わったといえる状況になったが、まったく売れなくなった訳ではなく、「期待するほどには売れなくなった」というのが現状であろう。売り上げが低迷するなか、出版社は紙媒体から電子書籍に移行しつつある。また、売り上げを低下させる原因の一つとして「スキャンレーション」という問題が挙げられている。ヤオイ・マンガを含めて、スキャンレーションの存在は作家の生活を脅かすとされている（溝口 2010: 161）。この非正規翻訳版のファイルには誰もが簡単にネット上でアクセスできる。しかし、こういったファイルを作成・消費する読者はマンガを購入したくないという動機のみで、スキャンレーションに踏み出すとは限らない。主な動機は「正規出版されたマンガに読みたいものがない」という事実のようである。読者のニーズがライセンス上の出版と剥離しているため、非正規翻訳版に興味が向く。マンガ市場のこの隙間に、マンガブームの終焉を告げる出版社が目をつければよいだろう。

フランスでは、リーマンショック後も、マンガを含む娯楽市場がアメリカほど打撃を受けなかった要因が別にあると思われる。マンガ文化だけでなく、社会状況もアメリカとは大きく異なる。例えば、フランスは、東アジアやヨーロッパの諸先進国と比較にならないほどの福祉国家であり、医療等の無料化もあるために少子化は進んでいない。そして、子供と若者の多い国では、マンガの読者も多いのではないか。さらに、中産階級の生活が脅かされているという危機感が比較的少なく、世界的に不況であるこの時期でも、娯楽にかかるお金を節約しない。

ところが、フランスにおいて日本マンガが如何に普及してきたかを考慮に入れる必要もある。最初は、日本のアニメが放送されていたが、これらの放送中止によって原作に対する需要が高まったといえる。1970年代にはアニメが主に子供向け番組として位置づけられ、子供たちがその物語に熱中していた。このフランスやベルギーでの「日本アニメ黄金期」は、テレフランス1という局による番組「クラブ・ドロテー」に象徴されていた。週4日、多い時は週20時間の放映を通して、「聖闘士星矢」、「ドラゴンボール」、「らんま1/2」という人気シリーズを子供たちに届けていた。しかし、この「天国」ともいえる状況は長続きしなかった。子供を熱中させる日本

アニメに対し、フランスの政治家が疑いの目を向け始めたためである。

2. 「アンチ・マンガの候補者」——日本マンガに左右された2007年のフランス大統領選

フランスでは、1993年から国家の指導により、自国の文化と言語を守るためにテレビ番組の何割か以上はフランスの作品でなくてはならない、外国もしくは他言語、とりわけアメリカと日本のものであってはならないという政策が導入された⁷。日本のテレビアニメの古典的作品といえる「北斗の拳」の暴力シーンが問題視され（Sabre 2012: 71）、1992年以降「クラブ・ドロテー」に対する猛烈な抗議が寄せられた。その結果、1994年からは、テレビで見ることのできる日本のアニメは著しく減ってしまう。

こういったアニメへの攻撃が、かえってフランスでのマンガブームの引き金にもなったと思われる。「ドラゴンボール」や「らんま1/2」、そしてその他の多くのアニメの原作はマンガであり、続編をテレビで見られないのなら、マンガで読めばいい！と考えたファンが大勢いたことだろう。行政は個人が購入するマンガの数までは制御できないという利点もあって、アニメ視聴者がマンガの読者に流れていくようになった。

マスコミに「文化闘争」と称されたこの運動は、1989年、社会党政治家のセゴレーヌ・ロワイヤル（Ségolene Royal）が執筆した書籍に象徴される⁸。ここでロワイヤルは、日本のアニメやマンガは醜い画風だけでなく、過剰な暴力表現と性描写にも特徴づけられ⁹、その影響下、フランスの子供の読解力が落ちると批判している。これらの主張は、フランス中のアニメ・

7 1993年、フランス上院議員がアメリカの映画の吹き替え版を制限したり、テレビ番組やラジオで放送される曲の4割以上はフランスのものでなければならないという法案を承認した。フランスだけでなく、スペインでも同じような制限を義務付ける法ができた。

8 『Le ras-le-bol des bébés zappeurs (テレビばかりみる子供にはうんざり)』(Royal 1989)。

9 自国産以外の暴力表現・性描写に過敏になるのはフランスに限ったことではない。皮肉なことにアメリカではヨーロッパのBDが同じ理由で忌避される。イギリスのコミックス研究の権威であるR・サピンは、アメリカでBDの売り上げが伸びない原因の一つが、BDの激しいと見なされる性描写にあると指摘している(2005: 184)。

マンガファンを敵に回すことになりながらも、公私を問わず長年にわたって存続していた¹⁰。ロワイヤルは、アメリカと日本の番組を制限しないと、子供達はアメリカ人のような考え方を身につけ、最悪の場合¹¹、日本語で会話するようになってしまうと述べていた (Royal 1989: 149)。そのため、ロワイヤルは日本のポップカルチャーだけでなく、日本人そのものが嫌いなのではないかと、つまり、人種差別的であるとマスコミ関係者に糾弾された¹²。

ロワイヤルは人種差別主義的な意図で当該図書を出版したのではないかもしれない。本人はフェミニズムの視点から、子供や女性を守ろうとして行動していたのかもしれない。しかしながら、日本のジェンダー関係に対する東洋趣味系のステレオタイプを抱いてしまったようでもあり、アニメやマンガにおける女性への暴行シーンの嫌悪感を繰り返す問題視することで、かえってアニメとマンガの多様性の知識が不十分であることを露呈してしまった。また女性向けのジャンルには一切触れていないことから、少女マンガやヤオイの存在を認識していなかったと推測できる。

2007年、ロワイヤルは大統領選に出馬するが、「アンチ・マンガの候補者」(candidate anti-manga) という皮肉めいたあだ名をつけられていた。選挙戦当時、ロワイヤルによる(マンガに関係のない)社会福祉政策案等は、共和党のライバルであるニコラ・サルコジが提案していた政策よりは評価されたにもかかわらず、ロワイヤルが僅差で選挙に負け、サルコジが2007年から2012年までフランス大統領を務めることになった。日本マンガに関する論争がフランスの大統領選に影響を及ぼしたということを裏付ける数字は残念ながらないが、日本アニメ鑑賞という遊びを「文化闘争」

10 2006年、日本の社会党政治家の福島瑞穂との対談の場でも日本のマンガを批判していた。(「反日本アニメ議員 仏大統領に立候補」 <http://animeanime.jp/article/2006/10/02/1154.html> 最終確認 2014年2月28日)

11 “Il faut quand même admettre que, sans quotas, nos enfants finiront par penser américain ou même parler japonais.” (1989: 148)

12 1991年、フランス総理大臣のクレソンは日本人を働き蟻に譬えた (Linhart 2009: 216)。つまり、日本好きのフランス人に、フランスの政治家の発言が人種差別的に写るのはロワイヤルの場合に限らない。

で奪われた世代が「アンチ・マンガ候補者」に大統領になってほしくなかった可能性は十分にあり得るのではないだろうか。ロワイヤルの図書出版からすでに25年も経過したが、未だにこれを根に持っている人々が、マンガやアニメファンのウェブサイトで苦情を言い合う場面がみられる。

ロワイヤルのライバルとなったサルコジは、5年間大統領を努めていたが、2012年のフランス大統領選を勝ち抜いたのは、社会党、そしてロワイヤルの別れた夫でもあるフランソワ・オランドであった。彼はサルコジ元大統領と同様に日本マンガに関して批判的な発言を控えていた。2013年6月7日には東京アンスティチュ・フランセ（日仏学院）でマンガ家の松本零士、池田理代子らと挨拶を交わしている¹³。

3. フランスでの同性愛観、そしてアニメ・マンガの同性愛表現の受容

周典芳が、台湾でのヤオイの受容は、ファンの同性愛観に影響があるという非常に興味深い研究を発表している¹⁴。周によると、台湾ではヤオイはホモフォビア¹⁵への「予防接種」の役割を果たし、ヤオイを読むことによって、腐女子は同性愛をより肯定的にみるようになる（周 2010）。溝口もまた、ヤオイというジャンルに、ホモフォビアに抵抗できる生産的なフォーラムの可能性を見出している（溝口 2010）。こうして、ヤオイを楽しむことによって、ファンの同性愛者に対する見方はより被差別的になるとしたら、逆に、それぞれの文化に既存する同性愛観がヤオイ・マンガの受容に影響を及ぼすことも十分に考えられる。そのため、ある文化におけるヤオイ・マンガの受容を調べる前に、その文化における主流の同性愛観について調べることも必要である。換言すると、予防接種を打つ前に、現地でのホモフォビアという病理の特性を詳しく知っておけばよい。

ここでは、フランスの同性愛観に関してわかりやすい一例を紹介しよ

13 <http://www.institutfrancais.jp/fr/blog/2013/06/12/francois-hollande-japon/>（最終確認 2014年2月24日）。

14 本書第3章参考。

15 同性愛・同性愛者に対する恐怖感。

う。英語圏と中国語圏と比べても、フランスあるいは西欧全域において腐女子文化は発展してはいるが、テーマである同性愛は問題視されないため、ヤオイというジャンルもあまり話題にならない。その原因は、同性愛者への一般的な寛容性にある。西欧全域をみると、ポピュラー文化における同性愛という題材は、英語圏、とりわけアメリカほど政治的に燃え上がるようなトピックではなく、西欧において、同性愛者が登場する表現が問題視されることは、明らかに差別的な描写でない限り、極稀である。

近年の西欧において、同性結婚は人権であるということはある意味「大前提」となっている。2014年現在、同性結婚を認めない国は少数派となっている。アメリカ国内では、同性婚認可自体は18州以上に広まりながらも、保守的な州では強い抵抗や排除運動なども行われており、これらの論争が日常的にマスコミに取り上げられている。同性婚認可は、世界規模で見ると、これを導入した国はここ10年間、どんどん増えていっている。オランダでは2001年、ベルギーでは2003年、フランスでは2013年に、北米ではカナダ、南米ではブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、オセアニアではニュージーランド、中米ではメキシコ、北欧ではアイスランド、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイ、アフリカ大陸では南アフリカ、そしてヨーロッパではスコットランド、スペイン、ポルトガルを含むほとんどの国で、同性婚は大きな問題もなく認可された。認可されていない国でも、正式なパートナーシップ登録を導入した国がほとんどである（ヨーロッパの場合、それはドイツ、チェコ、フィンランドやイギリス等に当たる）。つまり、異性同士の結婚と同等の権利を得られる。

現在ヨーロッパでは、同性愛者の排斥をなくそうとする運動が浸透しており、その結果、同性愛者の総理大臣が選ばれることもある。アイスランドの前総理大臣のJ・シングルザルドッティル（Jóhanna Sigurðardóttir）、そしてマンガ大国でもあるベルギーの現役総理大臣のE・ディルポ（Elio Di Rupo）らは、就任する数年前から同性愛者であることを臆することなく公言していた。

ヨーロッパでは、ほとんどの国で同性婚制度は大きな抵抗なく導入されてきたが、フランスでは、2013年に同性婚が制度として導入される際に、

パリを中心に反対デモが勃発した。国内外のマスコミにも注目されたこのデモは「意外」な印象を与えたかもしれない。マンガ家池田理代子の作品「ベルサイユのばら」でも描かれる18世紀のフランス革命。革命以降、フランスでは「自由・平等・友愛」という原理が政府と国民ともに大事にされてきた。同性愛者の人権も当然この三原理に従って尊重されるだろうと思われていた。2012年に樹立したオランダ政権は社会党ということもあり、フランスにデモをするほど多数の同性婚反対者がいると予測していなかった。世俗的であることで知られるフランスにおいて、この反対派は一体どこからでてきたのだろうか。

近年、アフリカ各国では差別主義者による同性愛者差別を煽り、そして同性愛者を処刑する政治家を援助する事実がマスコミそして学界に広く報告されている。この援助などは、アメリカの福音主義キリスト教（原理主義者）へと還元される（Cheney 2012: 77）。フランスまでも、アメリカ人の宣教師による影響が及ぶ。それを信者の数にみてとれる。50年前のフランスの福音主義キリスト教徒は5万人だったが、現在この数字は40万人を超えている。

国家として宗教の介入を固く拒むというフランス革命以来の世俗的な情勢を蝕むかのように、原理主義者は同性愛を罪とみなし、そして同性婚を認める訳にはいかないという考えを教義の一部として広めていった。これら福音主義キリスト教信者に加え、ネオナチスを含むその他の保守的団体が上記のデモに参加したが、その主張は国民の大多数の共感を得ることはできず、政権にも届かなかった。こうして同性婚への道はフランスでも開かれることになった。

これらの事象により、フランスを始めヨーロッパ全域では、ホモフォビアの症状はさほど深刻ではないとの印象を受けるかもしれない。ただ、だからといって同性愛の表現を含むマンガやアニメが問題視されないとは限らない。一つの事例としては、池田理代子が原作を描いたアニメ「おにいさまへ…」の放映中止である。池田はフランスで「マンガ界の貴族」と称されるほどの不動の人気を誇っており、「おにいさまへ…」の最初の7話は1993年にフランスで放映されたが、主人公の少女が他の少女に恋

をするため、「子供がみるものではない」とされ、放送中止となった (Clements and McCarthy 2006: 77)。しかし、興味深いことに、ホモフォビアが強いといわれるアラブ諸国では、一部編集された上、このアニメの全話が放映されていた。

ヤオイの受容を世界規模でみると、「この国は保守的なので、ヤオイのファンが少ない」「この国の女性は保守的だから、ヤオイでの人物描写がより差別的」等、そういった簡単な結論付けはできない。同性愛行為が法に罰せられるイスラム系の諸国でさえも、腐女子文化は存在し、秘密組織のように発展している。主にウェブ上だが、それだけではなく、密かなコンベンションへの参加などもみられる。現地のファンは、タブー行為をフィクションで楽しむという理由から宗教異端者であるということにはならない。信仰深くても、タブーな関係をフィクションとして楽しむことはさほど不思議なことではないようだ。

一括りに「西洋」とはいても、アメリカとヨーロッパの同性愛観には大きな相違がある。クイアー・スタディーズの分野で活躍するアルムブレイトが指摘するように、他の国の「同性愛観」を調べて比較する際、論考が本質主義的にならないように注意が必要である (Armbrrecht 2010: 153)。アルムブレイトによると、この数十年間アメリカで主流として展開されてきたアイデンティティ・ポリティクスは、フランスでは、フランスの社会を蝕む脅威として見なされている。これは当事者である同性愛学者からもいわれていることである (同上 153-157)。具体的に「性」に関することは、アメリカで「政治的」とされるようになったのに対し、フランスでは政治的ではなく、個人の倫理の問題で、公言するようなものではないとされている (同上 156)。

この相違をヤオイに当てはめてみよう。アイデンティティ・ポリティクスの立場からヤオイの作品分析をすると、物語の主人公が家族や職場の同僚などの前で、ゲイであることを^{テキスト}公言しないと、このマンガ家、もしくはファンが潜在的同性愛差別者と思われる可能性がある。物語の主人公が、「理想のゲイ」としての^{ロール}役割モデルに写るならば、勇気を出してカミング・アウトすべきと期待されるからである。逆に、フランスの視

点からは、性趣向は恋人以外の人には関係のないものであるので、カミング・アウトしなくて当然だ、と一切問題視されないだろう。

世界各地の腐女子文化を調査し、腐女子の動機やニーズを考察する際、現地の社会と文化、主流の思想を見逃してはならず、外部から覗く研究者という自らの立場を自覚し、従来のパラダイムが当てはまらない可能性を考慮に入れなくてはならない。

4. フランスでの腐女子活動

先述のように、フランスではマンガブーム全体が衰えることなく継続しており、ヤオイの売り上げも衰えることがない。一方で、ヤオイ・コンテンツが増えつつはあるが、日本とは比べ物にならないほど少ないため、対応の遅い出版社に呆れた腐女子がやはりスキャンレーションに流れていくという指摘がされている (Sylvius 2008: 37)。出版社は読者の需要に対応できないだけでなく、ファンからみると「大罪」と呼ばれるような事件を起こすこともある。出版社による恥ずかしいミスとして、フランスのヤオイ・コミュニティでもっとも有名なのは、2005年の「Okama」事件である。Taifu社はそれをジャンル名に「グラビテーション」というヤオイ・マンガを店頭に並べたが¹⁶、ファンがこれが日本で差別用語であると指摘するまでは、訂正しなかったのである。また、2009年に、アスカ (Asuka)社は、同年のジャパンエキスポで、フランス語版の『BeBoy Magazine』¹⁷を創刊する。日本の大手BL雑誌が欧米で出版される成功例はこのフランス語版だけだが、残念ながら流通の問題で2012年に一時休刊することになった (Sylvius 2012: 40)。しかし、フランスでは、紙媒体のマンガ雑誌を発刊すること自体が「無謀」とさえ言える。数十年の間ベストセラーだった大手BD雑誌『タンタン』¹⁸さえが、1990年代に廃刊となるほど出版業界は斜陽である。

16 「Taifu comics (Taifu Okama)」というラベルの作品は、いまだに中古本としてフランスの古本屋で見つけられる。

17 日本版は1992年にビブロスに創刊され、2006年以降、リブレに発行されている。

18 *Tintin* (1946-1993)

近年、出版社とファンは新たな関係を形成し始めている。例えば、2010年からフランス語ヤオイ・ポッドキャスト「yaoi cast」¹⁹が出版社と提携するようになり、ヤオイの新出版物を紹介している。その他にも、週数回アップデートされ、ナビゲーションしやすい「Yaoi Juice」²⁰というヤオイ・ニュースサイトは人気を博している。

ファンの集いとしては、例年パリで開催される Japan EXPO が日本でも注目されているが、そこで2003年にヤオイに関するパネルが組まれた。アメリカでは2002年から「Yaoicon」が開催され、また、フランスのリヨン市では2011年に最初の「Yaoi Yuri Con」²¹が開催された。2012年、2013年にも開催され続けた後者は少しずつ知名度を高めている。

一番活発なのは、出版業界でもコンベンションでもなく、フランスの腐女子が毎日活発に活動するファンサイトである。その中心になっているのは二次創作の短編・長編小説を掲載したり、読んだりすることである。例えば、fanfiction.net というアーカイブは、英語圏のユーザーが過半数を占めるが、「ナルト」というカテゴリーで6600話以上のフランス語で書かれた二次創作が掲載されている。その多くはヤオイであり、1800話あまりが「サスナル」（うちはサスケとうずまきナルト）というカップリングについて書かれた恋愛小説である。他にも、もっとも大きな、しかもフランス語のみのサイト fanfic-fr.net²²には合計36,000話以上が掲載されている。現在一番人気の高い作品はここでも不動の人気のあるナルトの二次創作だが、1990年代で流行っていた「聖闘士星矢」をネタとする二次創作短編・長編小説も640話掲載されている。

フランス語圏のヤオイ論としては、「万画 MANGA 10,000 images: Revue sur la bande dessinée japonaise」[万画 10,000 画——日本の漫画のレビュー] というエッセイ集シリーズの中、すでに2回にわたるヤオイ特集が注目に

19 <http://yaoi-france.kazeo.com/>（最終確認 2014 年 2 月 24 日）。

20 <http://www.yaoi-juice.com/>（最終確認 2014 年 2 月 24 日）。

21 <http://www.event-yaoi.fr/yaoi-yuri-con/>（最終確認 2014 年 2 月 24 日）。

22 <https://www.fanfic-fr.net/>（最終確認 2014 年 2 月 24 日）。

値する。2回とも編集担当だったH・ブリエン (Brient) は、フランスのヤオイ界において知名度が高く、腐女子文化を支えるウェブサイトの管理者等をボランティアとして務め、フランスでのヤオイに大きく貢献した人物である。フランスの腐男子の第一人者といえる。2回目の特集で大きく変わったのは、ゲイ男性向けマンガへの注目である。「薔薇 (バラ)」というゲイ向けのマンガ・ジャンルを代表する、国内外で知名度の高い田亀源五郎とのインタビューおよび「ヤオイってゲイなの？」(Le yaoi est-il gay?) というエッセイ、さらに薔薇マンガの紹介が本特集に記載されていた。

おわりに

本章では、フランスの腐女子文化の特徴、そしてその背景について論じてきた。フランスのヤオイコンテンツは増えつつあるが、日本に比べて極端に少ない。例えば、日本の人気マンガ家えすとえむは、2014年5月のトロント・ブックフェアにも招待され、フランスのエッセイ集に作家プロフィールが掲載されているほど海外では大人気である (Brient 2012)。えすとえむは、日本ですでに10冊以上の単行本を発表している今旬の作家だが、このうち英語に正式に翻訳されたのはわずか3冊で、フランス語では1冊にとどまっている。

2013年6月、京都精華大学国際マンガ研究センターによる第5回国際学会会議がインドネシアのバンドン工科大学との共催で開催された。その時、えすとえむがとアーティスト・トークを行った。オーディエンスの参加者の多くはえすとえむの作品を好んで読んでいたが、インドネシアでは正規出版の形で手に入らないので、ウェブ上のスキャンレーションとして読んでいたようだ。こういった現状はファンにも作家にも損であると思われる。

正規翻訳版が少ないのに読者層が存在する作家に注目を寄せることは本章の目的の一つであるが、もう一つは、グローバルな腐女子文化を研究する際の課題を指摘することにある。近年、国内外というより、主に日本語、そして英語でBL・ヤオイ研究が盛んに行われている。中国語や韓国語、

ドイツ語、スペイン語等の文化領域で、このジャンルの研究をしようとする研究者が増えていることは頼もしい。そして研究者同士の交流も活発になってきているので、お互いの理解や方法論の発展にも期待できる。しかし、2013年英語圏で出版された論文の一部²³をみると、多くの学者は自らの文化領域のパラダイム、主流の同性愛観にしがみつきながら、別の文化領域での腐女子文化やヤオイ現象を研究することで本質主義的な価値判断に頼ってしまう傾向もうかがえる。文化というものは多様で複雑なものだ。そしてそれぞれの文化は、ヤオイのようなポップカルチャーの受容に強い関連があることを忘れてはならないだろう。

23 2013年のPagliasotti, Nagaïke, McHarry eds. “Editorial: Boys’ Love manga special section”では曖昧な基準で日本の腐女子が「保守的」、そして中国の腐女子の活動が「先進的」と位置づけられている。

参考文献（日本語）

- 猪俣紀子「フランスの少女向け媒体におけるBD」ジャクリーヌ・ベルント編『国際マンガ研究1 世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究を開くために』京都精華大学国際マンガ研究センター、2010年、173-184頁
- グルンステン、ティエリ『マンガのシステム』（野田謙介訳）青弓社、2009年
- 溝口彰子「反映／投影論から生産的フォーラムとしてのジャンルへーヤオイ考察からの提言」ジャクリーヌ・ベルント編『国際マンガ研究1 世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究を開くために』京都精華大学国際マンガ研究センター、2010年、141-163頁
- 周典芳「台湾におけるヤオイ読者の男性同性愛に対する意識」『情報コミュニケーション学研究』第8・9号合併号、明治大学情報コミュニケーション学研究所、2010年、53-66頁

参考文献（英・フランス語）

- Armbrecht, Thomas J.D. 2010. "Universal Particularities; Conceptions of Sexuality, Nationality, and Culture in France and The United States." In: Jarrod Hayes, Margaret R. Higonnet, William J. Spurlin, eds. *Comparatively Queer: Interrogating Identities Across Time and Cultures*. NY/London: Palgrave MacMillan.
- Brient, Hervé, ed. 万画 *MANGA 10,000 images: Revue sur la bande dessinée japonaise: Homosexualité et manga: le yaoi*. Versailles: EditionsH, 2008.
- 万画 *MANGA 10,000 images: Revue sur la bande dessinée japonaise: Le Yaoi* (seconde édition, mise à jour et développée). Versailles: EditionsH, 2012.
- Cheney, Kristen. 2012. "Locating Neocolonialism, 'Tradition,' and Human Rights in Uganda's 'Gay Death Penalty'." In: *African Studies Review*, vol. 55 no. 2, pp. 77-95.
- Clements, Jonathan, and Helen McCarthy. *The Anime Encyclopedia* (revised and expanded edition). Berkeley: Stone Bridge Press, 2006.
- Groensteen, Thierry. *L'univers des manga: Une introduction a la bande dessinée japonaise*. Paris: Casterman, 1991.
- *Système de la bande dessinée*. Presses Universitaires de France, 1999.
- *Comics and Narration*, transl. Ann Miller. University Press of Mississippi (French original *Bande dessinée et narration*, 2011). 2013.
- Johnson-Woods, Toni, ed. *Manga: An Anthology of Global and Cultural Perspectives*. NY, London: Continuum, 2010.
- Linhart, Sepp. "Popular Leisure". In Sugimoto, Yoshio ed. *The Cambridge Companion*

- to *Modern Japanese Culture*. Cambridge University Press, 2009, pp. 216-235.
- Pagliasotti, Dru, Kazumi Nagaïke, and Mark McHarry. "Editorial: Boys' Love manga special section". In: *Journal of Graphic Novels and Comics*, vol. 4 no. 1 2013, pp. 1-81.
- Royal, Ségolene. *Le ras-le-bol des bébés zappeurs*. Paris: Robert Laffont, 1989.
- Sabin, Roger. "Some Observations on BD in the US". In: Charles Forsdic et al., eds, *The Francophone Bande Dessinée*. Amsterdam, NY: Faux Titre, 2005, pp. 175-188.
- Sabre, Clothilde. "Neojaponism and Pop Culture: New Japanese Exoticism in France." In *Regional Studies*, no. 6, 2012, pp. 67-88.
- Sylvius, Peggy. "Le yaoi en francophonie." In: Hervé Brient, ed., 2008, pp. 20-37.
- 2012. "Le yaoi en francophonie." In: Hervé Brient, ed., pp. 19-48.

ジェシカ・バウエンス = 杉本 (Jessica BAUWENS-SUGIMOTO, PhD) 1972年、ベルギー生まれ / 大阪大学人間科学博士 / 京都精華大学国際マンガ研究センター PD 研究員 (2014年まで)、龍谷大学国際文化学部専任講師 (2014年～) 日本マンガ学会会員 / 社会学、人類学、ジェンダー論、マンガ比較文化論 / 「海外レポート —— ル・ジャポンがカッコいいフランスで受容される日本のポップカルチャー」『ムーブ叢書 8 ポップカルチャーとジェンダー』(北九州市立男女共同参画センター 2011)、"Subverting masculinity, misogyny, and reproductive technology in SEX PISTOLS", IMAGE&NARRATIVE Online Magazine of Visual narrative, Vol. 12 (1) 2011, np.; (共著) Nora Renka, "Fanboys and 'Naruto' Epics—Exploring New Ground in Fanfiction Studies". Jaqueline Berndt and Bettina Kümmerling-Meibauer (eds.) *Manga's Cultural Crossroads*. 2013, Routledge, London, pp. 191-207.